

introduction

わが国における脊髄損傷医療の発展には、戦争と炭鉱が深く関係しています。旧パラブレジア医学会の設立にご尽力された天児民和 九州大学名誉教授と岩原寅猪 慶應義塾大学名誉教授はともに東京第一陸軍病院の脊髄損傷病棟で働いておられましたし、落盤事故で脊髄損傷になってしまった患者のために天児先生は総合せき損センター、岩原先生は村山医療センターの前身である旧国立療養所箱根病院でリハビリテーションや社会復帰まで含めた脊髄損傷医療の基盤を作られました。その後は、戦争も落盤事故もわが国にとっては遠い昔の話のようになってしまいましたが、しかし一方で、傷付いてしまった脊髄そのものに対するアプローチは半世紀にわたりなかなか進展がみられませんでした。

21 世紀に入り、幹細胞医学や再生医療が脚光を浴び、画期的な成果が動物実験を中心に報告されましたが、臨床現場までその成果が還元されるまではさらなる時間を要するものと感じておりました。実際、私の恩師であります故・芝啓一郎先生が 2013 年に第 48 回日本脊髄障害医学会を福岡で開催された際には「世界の治験現場からの最先端レポート」と題して riluzole などの報告がなされましたが、その時点では日本からのまとまった報告はありませんでした。しかし、その後 10 年と経たずして、わが国から複数のエビデンスレベルの高い脊髄損傷に対する臨床治験結果をご紹介できることに驚きと喜びを感じています。

本特集では、脊髄損傷に対する肝細胞増殖因子、顆粒球コロニー刺激因子、Muse 細胞や骨髄間葉系幹細胞の経静脈的投与、iPS 細胞由来神経幹細胞移植、ヒト化抗 RGMa 抗体などの治験結果や現状をわかりやすく解説していただきました。いずれも急性期から亜急性期脊髄損傷に対しての安全性と有効性確認を目的とした治験ですが、いずれは慢性期への有用性も検討されるものと考えられます。また、近年では非骨傷性頸髄損傷の増加など、脊髄損傷の臨床像自体も大きく変化しており、その診断や治療法にも新しい考え方が必須となっておりますので、ぜひ本号を参照されただけますと幸いです。また、トランスレーショナル研究での新たな知見が脊髄損傷医療の発展に大きく資する例として、血糖管理とバイオマーカー研究についても紹介していただきました。大変ご多忙のなかで執筆してくださった先生方に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。また読者の方々にとって、本特集が現時点での脊髄損傷に対する臨床や再生医療の全体像をつかんでいただく一助となれば幸いです。

大阪大学整形外科
岡田誠司